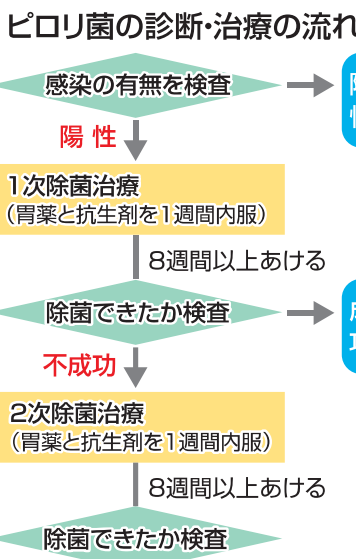


# 胃がん最大のリスク要因 ピロリ菌感染 患者に適した除菌法選択を



ヘリコバクター・ピロリ菌 (H. pylori) 感染は胃がんの最大のリスク要因であるため、わが国では無症候者を含むピロリ菌感染胃炎患者の除菌治療が、全症例に対して保険診療で可能です。免疫機能の未熟な5歳くらいまでの乳幼児期に感染するとされ、家族内、特に母子あるいは父子間が主な感染経路とされています。ピロリ菌陽性患者における胃がん発生率は年間0・3% (千人に3人)、長期的には10〜20年で2〜3%程度とされています。胃がん予防には小児・若年層の除菌治療が理想ですが、未成年者においては薬剤耐性率が高いことや薬物過敏症の併存疾患が除菌治療失敗の原因となるため、まずは適切に感染状態を確認し、患者さんに適した除菌法を個別に選択することが重要となります。

「H. pylori 感染の診断と治療のガイドライン (2024改訂版)」では、未成年者の感染を調べるスクリーニング検査として、便中ピロリ菌抗原測定法または尿中抗体検査を用



内科助教 川床慎一郎

からだを  
読み解く

九州大病院別府病院の治療・研究



## 発症未然に防ぐ 1次予防も重要

わが国の出生年別のピロリ菌感染率は急速に低下しているとはいえ、厚生労働省が3月に公表した、2021年の「全国がん登録罹患数・率報告」によると、胃がんの罹患率は大腸がん、肺がんに次いで第3位に位置しています (男女別ではそれぞれ4位)。ピロリ菌診療がさらに進むことで、胃がん撲滅につながる全除菌時代が来ることを期待されています。また、近年、ピロリ菌感染は大腸が

いることが推奨されています。また、若年発症の胃がんは高齢者に比べて、スキルス胃がんに代表されるような発見が難しいものも多く、進行した状態で発見されると治療は難しいです。

わが国の出生年別のピロリ菌感染率は急速に低下しているとはいえ、厚生労働省が3月に公表した、2021年の「全国がん登録罹患数・率報告」によると、胃がんの罹患率は大腸がん、肺がんに次いで第3位に位置しています (男女別ではそれぞれ4位)。ピロリ菌診療がさらに進むことで、胃がん撲滅につながる全除菌時代が来ることを期待されています。また、近年、ピロリ菌感染は大腸が

2021年の主な部位別がん罹患数(万人)

